

# 子宮体がん治療ガイドライン2013年版の 主な改訂ポイント

東北大学

永瀬 智

子宮体がん治療ガイドライン2013年版（以下、2013年版）発刊に向け、婦人科腫瘍学会ガイドライン作成委員長、副委員長である片瀧秀隆教授、三上幹男教授を中心に2011年秋に第一回の改訂委員会が開催された。その際、2013年版の内容について議論されたが、絨毛性疾患の章を新設すること、特殊組織型を独立した章にせず類内膜腺癌とまとめて治療指針を記載することが確認された。2013年版では、「初回治療」は加藤秀則先生が、「術後治療」、「進行・再発癌の治療」は久布白兼行先生が、「治療後の経過観察」、

「妊孕性温存療法」は高松潔先生が、「筋肉腫・肉腫」、「絨毛性疾患の治療」は井寛一先生が小委員長を務めることになり、病理医、放射線科医、腫瘍内科医を含めた43名の作成委員会委員で改訂作業を行った。2009年版の作成委員会委員は18名であったが、2013年版では多数の委員が担当することになり、まさに婦人科腫瘍医の知識を結集したガイドラインといえる。また、30名の評価委員の先生方やパブリックコメントを通して多数の建設的な意見をいただき、2013年版の完成に至った。

2013年版の大きな改訂点は、第8章として「絨毛性疾患の治療」を加えたことである。2011年7月に「絨毛性疾患取扱い規約第3版」が発刊され分類や管理方法が変更になったが、非常に適切な時期に治療ガイドラインを提示できたと思われる。第8章の総説には「FIGO2000 staging and risk factor scoring system for GTN」とその解説が記載されており、取扱い規約では記述が少なかった部分を補完する内容となっている。また、治療や管理に関するClinical Question (CQ) が6つ設けられているが、特にCQ48の「hCG低単位持続例の取扱いは？」は、日常診療で悩まされる事項についてエビデンスをもとに解説している。

2013年版では会員の要望や作成委員の検討により、CQ15の「子宮摘出術後に子宮体癌と判明した症例の取扱いは？」と、CQ25の「治療後のホルモン補充療法（HRT）は推奨されるか？」の2つが新しく加えられた。前者はだれもが経験する事項であり、推奨・解説に加え、治療指針についてのフローチャートも作成した。後者は、誰かに聞きたい、あるいは、専攻医などによく質問される事項である。推奨レベルの検討に際しては作成委員会内でも議論が

多かったCQの一つであるが、日本女性医学会編の「ホルモン補充療法ガイドライン2012年版」を参照し、治療後のホルモン補充療法の指針を新たに示している。「腹腔鏡下手術は標準術式の一つとなり得るか？」のCQに対する推奨については、海外から出ているエビデンスに対して日本では手術術式が保険収載されていない事情などから、推奨レベル決定の際に委員会内で大きな議論となった。日本産科婦人科内視鏡学会編「産婦人科内視鏡手術ガイドライン2013年版」の内容と整合性を保ちつつ、推奨・解説文において、婦人科腫瘍医の視点から腹腔鏡下手術の適応について明確な指針を提示している。

今回の改訂ではガイドライン利用者の利便性を考慮し、「本ガイドラインにおける基本事項」には、変更になった進行期分類（肉腫や腺肉腫を含む）や手術術式の定義、化学療法のレジメンなどを記載している。また、CQの解説中に参照すべきCQ番号を加えたり、推奨の欄の下に参照するフローチャートを示すといった、全体的に細かな点で配慮した仕上がりになっている。ぜひ、手に取っていただき、日々の臨床に役立てていただければ幸いである。

「JGOG Newsletter Vol.22 No.4より許可を得て転載」